

日本語五十音表の不整合性

— 「はぐれ音節」とハ行音便規則から —

吉田 妙子

1. はじめに

日本語の音節は、[k] [s] [ʃ] [t] [tʃ] [ts] [n¹] [h] [ϕ] [ç] [m] [y] [r²] [w] [g] [z] [dʒ] [d] [b] [p] の 20 の子音が、それぞれ [a] [i] [u] [e] [o] の 5 つの母音と組み合わせられてきた開音節（子音が ϕ の場合もある）であり、それを体系的に配列したものが五十音表である。しかし、それをヘボン式ローマ字表記で現すと、さまざまな不整合が見えてくる。以下は、初級学習者が必ず持つ疑問である。

疑問 1. どうしてサ行イ段の音節（シ）は、「si」でなく「shi」と表記されるのか³。

疑問 2. どうしてタ行イ段の音節（チ）とウ段の音節（ツ）は、「ti」「tu」でなく「chi」「tsu」と表記されるのか。また、どうしてザ行イ段の音節（ジ）は「zi」でなく「ji」と表記され、ダ行イ段の音節（ヂ）とウ段の音節（ヅ）は「di」「du」でなく「ji」「zu」と表記されるのか。

疑問 3. どうしてサ行濁音イ段の音節ジとタ行濁音イ段の音節ヂ、サ行濁音ウ段の音節ズとタ行濁音ウ段の音節ヅは、仮名表記が違うのに同じ聞こえの音になるのか。

疑問 4. どうしてハ行にだけ半濁音があるのか。

¹ [ŋ] という鼻子音もあるが、これは日本語では [n] または [ŋ] の異音とされているので、音素としては扱わない。

² 日本語のラ行音は巻舌音でなく弾き音なので、[r]（鉤針型のアール）で表す。

³ 本稿では、IPA に沿った音声字母には [] を付し、音節のローマ字表記には 「 」 を付す。

疑問 5. どうしてハ行音のフの子音だけ「h」でなく「f」なのか。

疑問 6. どうしてハ行音の連濁音がバ行音になったりパ行音になったりするのか。

これらは、日本人にとってはあまりに初歩的で当たり前の事実なので、かえって見逃されているのではないだろうか。本稿では、2で疑問1～3について論じ、3で疑問4～6について論じる。

2. サ行音とタ行音の「はぐれ音節」

2. 1 問題の所在

上記の問題に気づかせてくれたのは、実は学習者の発音や表記の誤用である。中国語母語話者が日本語の有声音を無気音で代用してしまうことはよく知られているが、彼らはよく「じごく（地獄）」を「ちごく（遅刻）」と発音し、「むずかしい（難しい）」を「むつかしい⁴と表記する誤用を犯す。しかし、彼らは決して「じごく」を「しごく」と発音したり、「むずかしい」を「むすかしい」と表記したりはしない。ここから、学習者はサ行有声音のジ・ズに対応する無声音は、サ行清音のシ・スでなく、タ行清音のチ・ツだと認識していることがわかったのである。

結論を先に言えば、サ行音とザ行音は、カ行音—ガ行音、タ行音—ダ行音、パ行音—バ行音のように、調音点も調音法も同じ対の子音が持つ典型的な形での無声—有聲の対立関係を持たない、ということであるが⁵、これは日本語の音韻体系、調音音声学、音韻史、中国語の音韻体系との比較を試みて初めてわかる問題なのである。本章では日本語教育の観点から、特に中国人学習者が陥りやすい発音・表記の誤りを参考にし、日本語

⁴「むつかしい」と発音する日本人もいるが、これは関西系の語形である。

⁵ 後で述べるように、タ行音—ダ行音のイ段音とウ段音だけは典型的な対立関係にない。

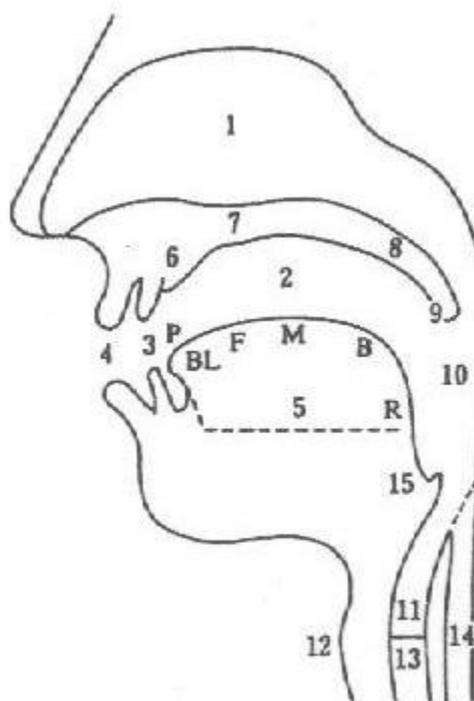
のサ行音・タ行音を中国語の音韻体系と比較しつつ、その歪みの所以を音声学、音韻史から検討したい。

2. 2 五十音を整合的に並べた場合の音節体系

まず、日本語の調音器官を確認しておく。

図1. 日本語の調音器官

| | |
|--------|--------|
| 1 鼻腔 | 6 歯茎 |
| 2 口腔 | 7 硬口蓋 |
| 3 歯 上歯 | 8 軟口蓋 |
| 下歯 | 9 口蓋垂 |
| 4 唇 上唇 | 10 咽頭 |
| 下唇 | 11 声帯 |
| 5 舌 | 12 喉頭 |
| P 舌尖 | 13 気管 |
| BL 舌端 | 14 食道 |
| F 前舌面 | 15 喉頭蓋 |
| M 中舌面 | |
| B 後舌面 | |
| R 舌根 | |



窪園（1999）より

次に、サ行音・タ行音のへボン式表記を以下に記す。

図2. サ行音・タ行音の全ての子音に5母音をあてがった場合のへボン式表記

(斜体字は現行五十音図の直音から外れる音)

| | 無声音 | | | | | 有声音 | | | | |
|-----|-------------|------------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 摩擦音 | sa | <i>si</i> | su | se | so | za | <i>zi</i> | zu | ze | zo |
| 摩擦音 | <i>sha</i> | shi | <i>shu</i> | <i>she</i> | <i>sho</i> | <i>ja</i> | ji | <i>ju</i> | <i>je</i> | <i>jo</i> |
| 破裂音 | ta | <i>ti</i> | <i>tu</i> | te | to | da | <i>di</i> | <i>du</i> | de | do |
| 破擦音 | <i>cha</i> | chi | <i>chu</i> | <i>che</i> | <i>cho</i> | <i>ja</i> | ji | <i>ju</i> | <i>je</i> | <i>jo</i> |
| 破擦音 | <i>tsha</i> | <i>tsi</i> | tsu | <i>tse</i> | <i>tso</i> | za | <i>zi</i> | zu | ze | zo |

このうち、斜体字の「*sha*」「*shu*」「*sho*」「*ja*」「*ju*」「*jo*」「*cha*」「*chu*」「*cho*」の9音節は現行五十音図で拗音系列の中に組み入れられているものであり、「*she*」「*je*」「*che*」の3音節は現代日本語の正式な拗音系列には記されていないが慣用音として認められていて仮名表記が可能（「シェ」「ジェ」「チェ」⁶）のものであり、「*si*」「*zi*」「*ti*」「*tu*」「*di*」「*du*」「*tsha*」「*tsi*」「*tse*」「*tso*」の10音節は五十音表の中になく仮名表記も定まっていないが英語などの影響で現代日本人に発音可能なものである。こうなると、拗音を五十音体系に組み入れれば、五十音表は整合的になるかのように見える。しかし、問題はそう単純ではなく、さらに問題が出てくる。

2. 2サ行音とザ行音の対立の問題

整合的な五十音表を作った場合、さらにいくつかの音節、いくつかの行ができるであろうが、その際、次のような問題が出てくる。

- ①サ行音（無声音）とザ行音（有声音）は、調音点が同じではない。

普通、有声音と無声音は、調音点が同じでありながら声帯の振動の有無によって対立する音、と定義されている。しかし、

⁶橋本（1950）五十音中のセ、ゼの音は、室町時代には「*she*」「*je*」だったようである（p.97）。また、同書では、奈良朝までの古代音ではセの発音は「*se*」「*she*」「*tse*」「*che*」のいずれとも考えられる、とある（p.68）。

試みに、サ行サシスセソとザ行ザジズゼゾを発音してみられたい。サシスセソは硬口蓋でも歯茎硬口蓋でも調音され得るが、日本人にとっては硬口蓋の方が調音しやすい。これに対して、ザジズゼゾは硬口蓋より前部の歯茎硬口蓋で調音されていることに気づくはずである。つまり、基本的にはサ行音は硬口蓋音であるが、ザ行音は歯茎硬口蓋音（前部硬口蓋音・後部歯茎音とも言う）なのである。

しかし、ザ行が硬口蓋で発音されることもある。「ひざ（膝）」とか、「かざん（火山）」などの場合、ザは前方の硬口蓋音サや軟口蓋音ヒの影響により、硬口蓋化する。しかし、「とざん（登山）」「ピザ（pizza）」などでは、ザは前方の歯茎音トや両唇音ピの影響により、歯茎の位置が保たれる。ジ・ズ・ゼ・ゾの音節も、同様である。つまり、ザ行音は基本的には歯茎硬口蓋音であり、硬口蓋化したザ行音は後方同化による異音である、ということになる⁷。

また、サ行音にも異音がある。「かさ（傘）」「ひさし（庇）」などの場合では、サは前方の硬口蓋音カやヒの影響により、硬口蓋の位置を保っているが、「まさつ（摩擦）」「たさつ（他殺）」などの場合は、サは前方の両唇音マや歯茎音タの同化を受けて歯茎化する。シ、ス、セ、ソの音も同様である。つまり、サ行音は基本的には硬口蓋音であるが、歯茎化したザ行音は後方同化による異音である、ということになる

② サ行音（無声音）とザ行音（有声音）は、調音法と調音者

⁷窪園（1998）などでは、語頭のザジズゼゾは歯茎硬口蓋音に、語中及び語末のザジズゼゾは硬口蓋音になるというが、なぜそうなるかを説明していない。「つじ（辻）」などのジが歯茎に近い部分で調音され、「キジ（記事）」などのジが硬口蓋で調音されることを考えると、やはり後方同化と考える方が妥当であろうと思う。また、これはチ、ツの調音についても言える。「バチ（罰）」「ナツ（夏）」などのチ、ツは歯茎に近い部分で調音されるが、「キチ（基地）」「クツ（靴）」などのチ、ツは硬口蓋で調音される。

また、橋本（1950）によると、チ、ヂ、ツ、ヅの音は奈良時代には [ti][di][tu][du] であったが、室町末期には現在の「tʃi」「dʒi」「tsu」「dzu」になったと言う（p.88）。

が同じではない。

サ行音は確かに摩擦音であり、舌面が硬口蓋（または歯茎）と接触することがない。しかし、ザ行音の場合は、舌面と歯茎（または硬口蓋）を接触させずにザジズゼゾを発音することはできないはずである。その証拠に、図2の「sa」「si」「su」「se」「so」の有声音と「tsa」「tsi」「tsu」「tse」「tso」の有声音はどちらも同じ「za」「zi」「zu」「ze」「zo」になる。ということは、ザ行音は摩擦音と破擦音の2種類があることになる。

秋永（1990）によると、現代の東京人は「策（ざる）」のザ（語頭のザ）は破擦音、「飾る（かざる）」のザは摩擦音で発音すると言うが、後者の方は、やはり前部の軟口蓋音カに影響された後方同化による硬口蓋化現象であると思われる⁸。調音点が硬口蓋化すれば舌端は使いづらいので前舌面を使うことになりやすく（図1参照）、舌面を使えば調音法もより摩擦音に近くなる。摩擦音のザは破擦音のザの異音と言えよう。

以上の①②を考慮すると、いわゆるサ行音は「前舌硬口蓋摩擦無声音」で「舌端歯茎硬口蓋摩擦無声音」の異音を持ち、いわゆるザ行音は「舌端歯茎硬口蓋破擦有声音」で「前舌硬口蓋摩擦有声音」の異音を持つ、ということになる。ということは、サ行音とザ行音は、無声 - 有聲の対立があるだけで、調音点も調音法も調音者もまったく別系統の音で、それぞれの異音が互いの音素と無声 - 有聲の対立を持つ、ということになる。

それ故、摩擦音には[s]を子音に持つ行音とそれに対立する有声音、および[ʃ]（エッシュ）を子音に持つ行音とそれに対立する有声音、の2種類の対立があることになる。では、[s]を子音に持つ行音と、[ʃ]を子音に持つ行音にそれぞれ対立するのは、どのような音節であろうか。

⁸但し、秋永（1990）は、関西では「策（ざる）」のザは破擦性が弱まって摩擦音に近い音（「じゃる」に近い音）になっている、と言う。

図 3 . 前舌硬口蓋摩擦音 ([s] を子音に持つ行音) ⁹

(斜体字は、現代日本語の音韻体系にない音)

無声音

有声音¹⁰

sa si su se so

yza *yzi* yzu yze yzo

図 4 . 中舌硬口蓋摩擦音 ([ʃ] を子音に持つ行音)

(斜体字は、現代日本語の音韻体系にない音)

無声音

有声音

fa fi fu fe fo

yja *yji* *yju* yje yjo

いずれも、有声音の方は現代日本語の音にはなく、日本人にとって耳慣れない音節である。しかし、「yji」は中国語の「日」の音に相当し、「yju」は中国語の「入」の音に相当する音ではないかと考えられる。

2 . 3 破擦音の問題

① 破擦無声音チ、ツに対立する有声音ヂ、ヅは、現代日本語にはない音節である。

② チ、ヅの音は、ジ、ズの音とは別物である¹¹。

無声音 [ʃ] [s] [tʃ] [ts] に対立する有声音を [j] [z] [dʒ] [dz] と表記するならば¹²、図 5 のような対立が生まれるはずである。

⁹サ、ス、セ、ソの調音点が硬口蓋ということになると、IPA 記号では [s] でなく [s̺] (右尾つきの s) と表記することになるが、それに対立する歯茎音の s が日本語には存在せず、また [s̺] の異音の [s] も存在することから、本稿ではサ、ス、セ、ソの子音をこれまでどおり [s] と表記する。

¹⁰舌面が硬口蓋と接触しないことから、硬口蓋接近音の [y] を用いた。
¹¹秋永 (1990) によれば、高知県、九州の大部分、山梨県奈良田などではヂとジ、ヅとズを区別すると言う。

¹²秋永 (1990、p.97) によれば、ロドリゲス「大日本文典」(1604-1608) では、ジは「Ii」、ズは「Zu」、ヂは「Gi」、ヅは「Dzu」と表記されている。

図5. 「シージ」「チーヂ」「スーズ」「ツーツ」の対立

(斜体字は五十音表にない音節)

| | 無声音 | | | | | 有声音 | | | | |
|------------|-----|------------|------------|------------|-----|-----|------------|------------|------------|-----|
| 中舌硬口蓋摩擦音 | ʃa | <i>ʃi</i> | ʃu | <i>ʃe</i> | ʃo | ja | <i>ji</i> | ju | <i>je</i> | jo |
| | | シ | | | | | ジ | | | |
| 前舌硬口蓋摩擦音 | sa | <i>si</i> | su | se | so | za | <i>zi</i> | zu | ze | zo |
| | | | ス | | | | | ズ | | |
| 中舌歯茎硬口蓋破擦音 | tʃa | <i>tʃi</i> | tʃu | <i>tʃe</i> | tʃo | dʒa | <i>dʒi</i> | dʒu | <i>dʒe</i> | dʒo |
| | | チ | | | | | ヂ | | | |
| 舌端歯茎硬口蓋破擦音 | tsa | <i>tsi</i> | tsu | tse | tso | dʒa | <i>dʒi</i> | dzu | dze | dzo |
| | | | ツ | | | | | ヅ | | |

このように、ジは中舌硬口蓋摩擦有声音、ヂは中舌歯茎硬口蓋破擦有声音、ズは前舌硬口蓋摩擦有声音、ヅは舌端歯茎硬口蓋破擦有声音であり、ジ・ズとヂ・ヅの間には明らかに破擦音と摩擦音の対立が見られるのである。

ヂ (dʒi) とヅ (dzu) は調音者は違うものの、ジ・ズよりも前寄りの調音点を持つ。東京ではあまり聞かれない音であるが、ヂ (dʒi) は中国語のローマ併音表記「ji」(鶏、吉、己、計など) を有声にした音に近い音ではなかろうか。また、ヅ (dzu) は中国語のローマ併音表記「zi」(孜、姿、子、字など) を有声にした音に近い音ではなかろうかと思われる。

古代音を紐解くに、山口他 (1997) によれば、奈良時代には歯茎破裂音の「ti」「tu」「di」「du」が存在した。そして、平安・鎌倉時代まではジとヂ、ズとヅの区別が截然としており、「富士・ふじ／藤・ふぢ」「水・みづ／不_v見・みず」のような区別があった (秋永 1990)。しかし、平安末期にヂ・ヅが口蓋化し始め (山口他 1997)、14世紀末からジとヂ、ズとヅの混同が起り始め、江戸時代にはその区別が完全に消滅していたと言う (秋永 1990)。

「びじん (美人)」「ちじ (知事)」「みず (水)」「ちず (地図)」

などは先行する両唇音や歯茎音による後方同化で歯茎硬口蓋音になるが、「かじ（火事）」「さじ（匙）」「きず（傷）」「すず（鈴）」などは先行する軟口蓋音や硬口蓋音による後方同化で硬口蓋音になる。いずれにしろ、ジとヂ、ズとヅは現代では弁別音素でなく、条件異音であると考えられる。

2. 4 国際音声記号による系統的なサ行・タ行五十音図

以上のことを考え、前舌硬口蓋摩擦音の [s] と [z]、中舌硬口蓋摩擦音の [ʃ] と [j]、舌端歯茎破裂音の [t] と [d]、舌面硬口蓋破擦音の [tʃ] と [dʒ]、中舌歯茎硬口蓋破擦音の [ts] と [dz]、これらすべての子音に5母音を当てがってサ行音・ザ行音・タ行音・ダ行音の整合的な五段表を国際音声字母で表すと、図6のようになるであろう。

図6. サ行とタ行の整合的な五段表

(ローマ字の斜体字、片仮名欄の×は五十音表にない音。

カタカナ欄の () は五十音表にはないが表記可能な音。

□は現代日本語のサ行・ザ行・タ行・ダ行の音。)

| | 無声摩擦音 | | | | | 有声摩擦音 | | | | |
|------------|----------|------|-----|------|------|----------|-----|-----|------|-----|
| 前舌硬口蓋摩擦音 | sa | si | su | se | so | za | zi | zu | ze | zo |
| | サ | × | ス | セ | ソ | ザ | × | ズ | ゼ | ゾ |
| 中舌硬口蓋摩擦音 | ʃa | ʃi | ʃu | ʃe | ʃo | ja | ji | ju | je | jo |
| | シャ | シ | シュ | (シエ) | シヨ | ジャ | ジ | ジュ | (ジエ) | ジョ |
| | 無声破裂・破擦音 | | | | | 有声破裂・破擦音 | | | | |
| 舌端歯茎破裂音 | ta | ti | tu | te | to | da | di | du | de | do |
| | タ | × | × | テ | ト | ダ | × | × | デ | ド |
| 中舌歯茎硬口蓋破擦音 | tʃa | tʃi | tʃu | tʃe | tʃo | dʒa | dʒi | dʒu | dʒe | dʒo |
| | チャ | チ | チュ | (チエ) | チヨ | ヂャ | ヂ | ジュ | (ジエ) | ジョ |
| 舌端歯茎硬口蓋破擦音 | tsa | tsi | tsu | tse | tso | dza | dzi | dzu | dze | dzo |
| | (ツア) | (ツイ) | ツ | (ツエ) | (ツオ) | × | × | ヅ | × | × |

まるで恐竜の小指の骨から全体像を復元するような作業をやってみたわけだが、つまり、サ行のイ段音、タ行のイ段音とウ段音はそれぞれ別の子音を持つ五段表から子音を借りてきたものである。このような音節を、仮に「はぐれ音節」と呼ぼう。

2. 5ハ行における「はぐれ音節」

この「はぐれ音節」現象は、ハ行音にも存在する。ハ行音の整合的な五段図は、次のようになる。

図7. ハ行の整合的な五段図

(斜体字は現代日本語の音韻体系にない音節、
□は現代語のハ行音。)

| | | | | | |
|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 軟口蓋摩擦音 | □ ha | <i>hi</i> | <i>hu</i> | □ he | □ ho |
| | ハ | | | ヘ | ホ |
| 咽頭摩擦音 | <i>ça</i> | □ çi | <i>çu</i> | <i>çe</i> | <i>ço</i> |
| | | ヒ | | | |
| 両唇摩擦音 | <i>ɸa</i> | <i>ɸi</i> | □ ɸu | <i>ɸe</i> | <i>ɸo</i> |
| | | | フ | | |

この場合はヒとフがはぐれ音節である¹³。「hu」は平仮名では

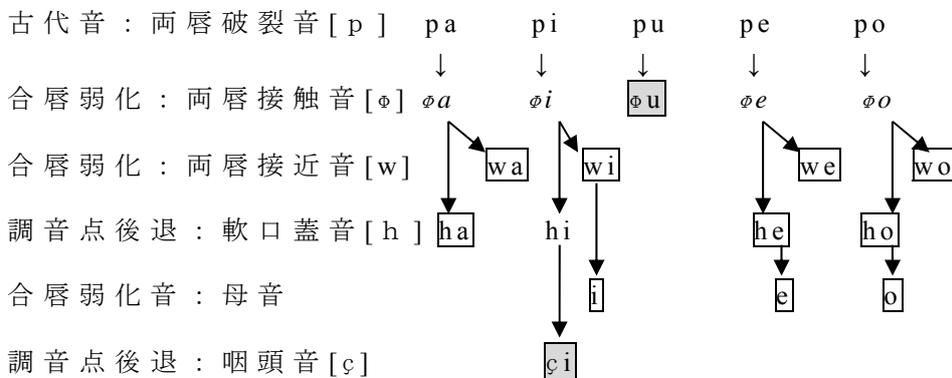
¹³ 橋本(1950)によれば、古音ではハ行の子音は両唇破裂音の[p]、つまりパピプペポに近い発音であったが(沖縄では現在でもハ行子音をpで発音するという)、両唇の合わせ方が徐々にゆるくなって、平安朝から室町時代においては[ɸ]音になっていたと言う(p.68-69)。そして、両唇の合わせ方がさらにゆるくなると、語中・語末の両唇破裂音の[ɸ]音は両唇接近音の[w]音になり(例えば「あはれ(憐れ)」「かほ(顔)」「いへ(家)」と書いて「あわれ」「かお」「いえ」と読む、など。厳密に言えば語中のハ行音のイエオの発音は現在のそれとは違った発音であったが、江戸時代においてワ行のイエオはア行のそれと区別がなくなったと言われる)、語頭の[ɸ]音は調音点が後退して、ついにはまったく両唇を合わせない軟口蓋摩擦音の[h]音へと変化した。つまり、現代語のハ行音のうち、フは古代の両唇破裂音を残した音であり、ハ、ヘ、ホは調音点が後退した軟口蓋摩擦音であり、ヒは軟口蓋摩擦音のh音がさらに後退して咽頭摩擦音になったものである。これらの音韻の歴史的变化をたどると、次のようになる。

(□は現代日本語に残っている音、■は「はぐれ音節」)

表記できないが、中国語の「呼、胡、虎、戸」に近い音だと思われる。「 ϕa 」「 ϕi 」「 ϕe 」「 ϕo 」は現代日本人は外来語の影響でそれに近い音は発音できるものの、やはり相当発音困難な音である。また、軟口蓋摩擦音「 ζi 」の子音は喉仏を震わすドイツ語の“*Ich*”の *ch* に近い音なので、ヒ以外の「 ζa 」「 ζu 」「 ζe 」「 ζo 」をこの子音で発音することは、日本人にとって相当無理がある。

これらのような「はぐれ音節」は五十音表においてはヘボン式表記の整合性を乱すものとして継子扱いされているが、古代音などもともと他の子音を持つ五段表から借り出されてきたものなのである。

そして、音節を貸し出した方の五段表について言えば、それぞれ貸し出した音節以外の音節は、①現代五十音表では拗音の系統に入っている音節（シャ、シュ、ショ、ジャ、ジュ、ジョ、チャ、チュ、チョ）、②古代音にはあったが、現代では消滅してしまった音節（「 ϕa 」「 ϕe 」「 ϕo 」「 ti 」「 tu 」「 di 」「 du 」「 $t\text{sa}^{14}$ 」）、③古代音では弁別素性として音素をなしていたが、現在では条件異音として残っているのみである音節（「 dza 」「 dzi 」「 dzu 」「 dze 」「 dzo 」）、④もともと日本語の音声体系にはなく、五十音表中にもないが、外来語の影響などで現代日本人が発音できるようになった音節（「 si 」「 zi 」「 $\text{ʃ}e$ 」「 je 」「 $t\text{ʃ}e$ 」「 $d\text{ʒ}e$ 」「 $t\text{si}$ 」「 $t\text{se}$ 」



¹⁴ 「おとつあん」などのように、江戸時代から明治初期にかけて、促音の後のサはツァと発音されることがあった。考えてみれば、ザ・ゼ・ゾのような歯茎硬口蓋破擦有声音が発音できるのに、それに対立する無声音ツァ・ツェ・ツォが発音できないわけがない。現代でも、冗談表現で「まっさお（真つ青）」を「まっつあお」と発音することがある。

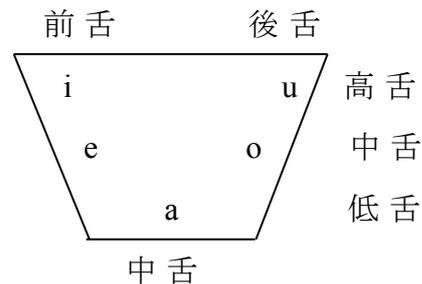
「tso」「çi)」¹⁵、なのである。

2. 6 五十音図不整合の調音音声学的原因

では、このような「はぐれ音節」が、なぜ存在するようになったのであろうか。これは、母音の調音点と関係がある。図8で調音点による母音の類型を示す。

図8. 日本語の5つの母音の類型

- ア：円唇中舌低母音
- イ：平唇前舌高母音
- ウ：円唇後舌高母音
- エ：平唇前寄舌中母音
- オ：円唇後寄舌中母音



このうち、イとウは高母音である。高母音は、舌面が硬口蓋に近づいてできる音である（硬口蓋母音）。舌面が硬口蓋に近づけば、歯茎硬口蓋での調音は無理になり、サ行摩擦音の「si」と「zi」は硬口蓋化して自然に「ʃi」と「ʒi」になる。

タ行音はサ行音よりも前寄りの歯茎破裂音であるから、硬口蓋化すれば舌面で破裂音を作るとはさらに無理になり、「ti」「di」は破擦音の「tʃi」「dʒi」になる。「dʒi」はさらに硬口蓋化が進んで「ji」になる。また、「tu」「du」は同じく硬口蓋化して、「tsu」「dzu」になるが、ウは高母音であるばかりでなく後舌母音でもあるので、調音点がさらに後ろに進んで「dzu」は「zu」になり、結果としてジ・ズとヂ・ヅは、図9のように同じ聞こえの音になる。

¹⁵ 平成3年（1991年）6月の「外来語表記」についての内閣指示では、33種の新しい音節を認め、国語化の度合いの高い第一表（シェ、チェ、ティ、ファなど13種）と、国語化の度合いがそれほど高くない第二表（イエ、クエ、ツエ、ウァなど20種）に分けて、表記の仕方を示している。しかし、それらの音節が公認されている五十音表の中に整備して位置づけられていないのは、国語行政の遅れと考える。

図 9 . サ行・タ行のイ段音とウ段音の硬口蓋化過程

| | | | |
|----------|-----|---------------|-----|
| si → fi | (シ) | zi → ji | (ジ) |
| su | (ス) | zu | (ズ) |
| ti → tʃi | (チ) | di → dʒi → ji | (ヂ) |
| tu → tsu | (ツ) | du → dzu → zu | (ヅ) |

この際、疑問に感じられるのは、なぜヂとヅだけが2段階の硬口蓋化を受けるのか、ということである。これは想像の域を越えないのだが、調音点が後方に行けば行くほど、有声化が起こりやすくなるためでないかと考えられる。因みに、「ちじ(知事)」のジ(dʒi)と「かじ(火事)」のジ(ji)、及び「ちず(地図)」のズ(dzu)と「かず(数)」のズ(zu)を比べてみられたい。「かじ(火事)」のジの方が「ちじ(知事)」のジよりも、また「かず(数)」のズの方が「ちず(地図)」のズよりも有声度が高いことに気づかれよう。舌が奥に行くほど濁音になりやすいのは、声帯の振動が調音点に伝わりやすく、また破擦音より摩擦音の方が音持続が長いため振動が長く保たれるからだと思われる。中国語において、最も後舌の巻舌音[ʃh]¹⁶だけに対立する有声音[r]が存在することは、その傍証にはほかならないのではないだろうか。

2. 7 中国語字母との関係

このような音の系統性は、中国語の音韻体系を観察すれば、より容易に見えてくる。

日本語の子音のような有声－無声の対立でなく、中国語の子音は無気－有気の対立を持つという違いこそあれ、両唇破裂音[b-p]の対立、歯茎破裂音[d-t]の対立、咽頭破裂音[g-k]の対立は、日本語のパ行－バ行、タ行－タ行、ガ行－カ行の無声－有聲の対立と対応するものである。しかし、サ行－

¹⁶ 本稿では、中国語の発音表記はローマ併音で行う。

ザ行の対立に相当する無気—有気の対立だけは、[j—q—x]、[zi—ci—si] の3項対立になっている。これは、調音点を同じくする3子音のうち、最初の2項が破擦音の無気—有気の対立で、最後の1項が摩擦音と考えられる。(摩擦音は有気に決まっているから、対立する無気音はない。)

さらに、巻舌音に至っては、[zh—ch—sh—r] の4項対立である。これは、やはり調音点を同じくする4子音のうち、最初の2項が破擦音の無気—有気の対立であるが、後の2項は摩擦音には無気—有気の対立があり得ないので、例外的に有声—無声の対立になったと見られるであろう。

つまり、中国語では破擦音と摩擦音が同系統の音と考えられて、セットになっている。3グループの中のそれぞれ1種の無気音 [j、zi、zh] に対してそれぞれ2つの有気音 [q—x]、[ci—si]、[ch—sh] が対立すると捉えられているのである。これを日本語の有声—無声の対立に置き換えれば、摩擦音の無声音チ・シはともに同一の対立有声音jiを持ちやすいことがわかる。

また、[j—q—x]、[zi—ci—si]、[zh—ch—sh—r] のうち、厳密に対立するのは破擦音同士の [j—q]、[zi—ci]、[zh—ch] だけであり、摩擦音は調音点が近似しているというだけで調音法は違うので、いわば付録的な存在である¹⁷。

つまり、中国語の破擦音と摩擦音の対立関係は次のようになる¹⁸。

図 10. 中国語の破擦音と摩擦音の対立関係



¹⁷ 中国語では、g、k（軟口蓋破裂音）、h（軟口蓋摩擦音）も、調音点の一致と調音法の類似によって1グループとされている。

¹⁸ それ故、中国語では摩擦音・破裂音（または破擦音に近似した音）を同系統の音と扱っており、独立した調音法とは扱っていないということになる。

それ故、学習者も「じごく（地獄）」を決して「しごく」とは間違えないで「ちごく（遅刻）」と発音し、「むずかしい（難しい）」を決して「むすかしい」とは間違えないで「むつかしい」と書いてしまうのであるが、それにもかかわらず、「し」と「じ」、「す」と「ず」がある意味での対立関係にあることを自然に納得していることがわかる。

このように、中国語の子音音素の観察は、日本語のサ行音とザ行音が決して対立していないことを教えてくれるのである。

3. 日本語の音構成における無声子音 [p] の特殊性

3. 1 問題の所在

ハ行音が五十音の系統を壊している問題については、上田万年（1898）がつとに指摘しているところである¹⁹。氏は「ハヒフヘホの濁音はバビブベボであるが、バビブベボに対する清音は音の性質から見ればパピプペポであるべきであつて、ハヒフヘホではない。パピプペポは清音であつて、半濁音というのは世人をまどはすものである。」と主張している²⁰。これは音声学の用語を用いれば「両唇破裂有声音バビブベボに対する両唇破裂無声音はパピプペポであり、調音点も調音法もまったく違うハヒフヘホは別系統に位置づけるべきである」ということになろうが、これは本稿1で述べた疑問4「どうしてハ行にだけ半濁音があるのか」と疑問5「どうしてハ行音のフの子音だけ h でなく f なのか」に照応するものである。それは前節で述べたところであるが、本節では疑問6「どうしてハ行音の連濁音がバ行音になったりパ行音になったりするのか」、つまりハ行音

¹⁹ 上田（1898）「語学創見」（『帝国文學』所収）。なお、引用は橋本（1950）による。

²⁰ 橋本（1950）、p.262より転載。上田万年はこのほか「ハ行音の子音がもともと p であり、その後 ϕ になり、さらに h に変化したと」という音の歴史的変遷を述べているが、これらの説については橋本も「まことに卓見といふべきであつて、今日に於ては、多少の異見をさしはさむ人もないではないが、まづ學界の定説となつてゐるのである。」と評している。

の音便規則の問題を考察することによってハ行音の問題を検討していく。

3. 2 パ行音の現れ方

パ行音が現われるのは次の語においてのみである。

- ① オノマトペ：ぱあ、ぷんぷん、ピンポーン、等
- ② 外来語：ペット、スピード、パン、等
- ③ オノマトペや外来語との混種語：パくる、パチンコ、鷺ペン、等
- ④ 囃し言葉・罵り言葉：アッパラパー、おちゃっぴい、チン
 ブンカンブン、あっぷっぷ、オッペケ
 ペッポペッポッポ、アンポンタン、等
- ⑤ 音便：1) 強制的音便²¹：発表 はつ ひょう → はっぴょう
 2) 任意的音便：やはり や はり → やっぱり²²
- ⑥ 接尾辞：安っぽい

これ以外にはパ行音は現われない。元々の和語名詞にも漢語名詞にもパ行音はない²³。辞書のハ行を見るとよい。外来語とオノマトペ、あるいは新語・俗語の類い以外は、パ行で始まる語はないはずである。これらの語は外来語を除いて実質語ではなく、[p]音の働きは、意味構成より音構成に焦点があると考えられる。[p]は日本語の音調整専門の音と言ってもいいようだ。

3. 3 パ行音便の現われる環境

連濁とは、2語が連続して新しい語を作る場合、後接語語頭

²¹ 「強制的音便」とは、例えば「発表」は必ず「はっぴょう」と読まなくてはならず、「はつひょう」と読んではいけない、という音便規則である。これに対して「任意的音便」とは、例えば「やっぱり」は「やはり」の訛りと考えられ、いずれを選択してもよいということである。

²² 「やっぱり」は江戸時代の六方詞が起源だそうであるが、六方の中で「やはり」が「やっぱり」に音韻変化していく過程はハ行の音便変化一般と軌を一にしているだろう。

²³ 麻雀の「パイ(牌)」などは漢語であるが、外来語と見なしていいだろう。

の無声子音（[k] [s] [t] [h]²⁴）が有声化する現象である。例えば、「日本（nihon）＋髪（kami）」は「日本髪（nihon-gami）」となるが、これは「nihonkami」と、後接語語頭の無声子音 [k] の前後が有声音（母音）なので、無声子音 [k] がそれに影響されて有声化される、一種の同化現象である²⁵。

ハ行音においてもむろんこの連濁現象が見られるわけだが、ハ行音においては、無声子音 [h] が有声音の [b] へと変化する場合と、同じ無声子音の [p] へと変化する場合がある²⁶。ハ行音がパ行音に音便変化している語を記述すると容易に気づくことだが、他の無声子音が前接語のいかなる音環境においても連濁現象を引き起こし得るのに対し、パ行連濁現象が起きる場合は前接語の語尾の音声環境が決まっている。

① 前接語の語尾が促音 例 達筆：たつ ひつ→たっひつ

② 前接語の語尾が撥音 例 乱筆：らん ひつ→らんっひつ

これ以外の環境ではパ行音は現われない²⁷。

例 毛筆：もう ひつ ×もうっひつ

3. 3. 1 前接語の語尾が促音の場合

前接語の語尾の子音が無声子音のタ行音で母音が [u]、つまり [-tsu] で²⁸、後続音が無声子音で始まる場合、[-tsu] は促音化

²⁴ [s] の異音として [ʃ]、[t] の異音として [tʃ] [ts]、[h] の異音として [ç] [ç̥] を含むが、本章ではそれぞれ [s] [t] [h] を無標の音素として提示する。

²⁵ 連濁と裏腹の関係にある同化現象は、関東地方で聞かれる母音無声化である。これは、無声子音に挟まれた高舌母音の [i] と [u] が無声化して聞こえがなくなる現象である。

例：がくせい（学生）gakusei→gakk̥sei

高舌母音の [i] と [u] は口室から流れ出る空気の量が少なく、従って聞こえも小さくなる。これは母音性の最も低い母音なので、子音同化しやすいのである。連濁も母音無声化も、有声音と無声音が互いに縄張りを主張しあって起こす、同化現象の両面だと考えられる。

²⁶ [h] が [p] に変化する場合は厳密な意味では「連濁」とは言えないので、以後は「パ行音便」と呼ぶことにする。

²⁷ 政治大学日本語学科の2008年度大学院1年生の辞書調査によると、撥音と促音以外の音に後続するハ行音便で、[p] 音は一つもなかった。

²⁸ もちろん、無声子音には [s] も [h] もあるわけだが、何故か「-

現象を起こす。

例 発刊：はつ かん→はっかん

出世：しゅつ せ→しゅっせ

葛藤：かつ とう→かっとう

ところが、無声子音 [h] の場合は、[k]、[t] と違い、無声子音ではあるが破裂音ではなく摩擦音である。促音「ッ」は無声子音の破裂音の前以外では非常に発音しにくい²⁹。また、[b] は破裂音であるが有声子音であるから、促音に後続し得ない。そこで、[p] に白羽の矢が当たり、前接語の語尾が [-tsu] の場合³⁰、[-tsu] は促音化現象を起こすだけでなく、さらに後続子音の [h-] が無声破裂音 [p-] に変化する。

例 出版：しゅつ はん→しゅっぱん

出費：しゅつ ひ→しゅっぴ

発奮：はつ ふん→はっぶん

月餅：げつ へい→げっぺい

割烹：かつ ほう→かっぽう

但し、これは漢語に限られるようである。

su」「-fu」で終わる語の後の無声子音には促音化現象が見られない。しかし、「あそこ」がなまって「あすこ」になり、さらに「あっこ」と言う人があるように、変化の途中なのかもしれない。「あそこ (asoko)」は無声子音を含む音「so」「ko」が連続するが、無声音の連続は発音時に大変負担になる。そこで前の母音「o」を「u」に変えて「su」に転じて「あすこ (asuko)」にすれば、「su」は無声母音で発音することができ、「あすこ (asko)」になって発音が楽になる。この「あすこ」がさらに「あっこ」となったのは、促音化現象への移行期にあると考えられる。また、「-fu」で終わる語はほとんど見当たらない。

²⁹ 「アッハッハ」などの擬声語は別である。

³⁰ [h] は前接語が数字で語尾の子音が「-ku」の場合、つまり六（ろく）も同様の現象を起こす。

例 六本木：ろくほんぎ→ろっぽんぎ

しかし、これは前接語が数字の時のみであり、前接語が数字でない場合は、連濁現象は起こらない。

例 学派：がくは ×がっぱ 白票：はくひょう ×はっぴょう

楽譜：がくふ ×がっぷ 悪弊：あくへい ×あっぺい

確保：かくほ ×かっぽ

また、前接語が数字の場合は、前接語の母音が chi で後続子音が [k] [t] [h] の場合も促音化する。

例 1回：いちかい→いっかい、8点：はちてん→はってん、

8本：はちほん→はっぽん

例 初春：はつはる ×はっばる
 初日：はつひ ×はっび
 夏服：なつふく ×なっぷく
 初穂：はつほ ×はっぼ

かくして、「出版」は「しゅつはん」とも「しゅっはん」とも「しゅつばん」とも「しゅっばん」ともならず、「しゅっばん」となるわけである³¹。

3. 3. 2 前接語の語尾が撥音の場合

3. 3. 2. 1 [h] → [b] と [h] → [p] の変化例

他の無声子音は、撥音「ン」[n] 以外の前接環境でも連濁現象を起こす。

例 笑顔：え かお→えがお
 釣り竿：つり さお→つりざお
 茶筭筒：ちゃ たんす→ちゃだんす
 仲立ち：なか たち→なかだち

むろん、[h] も同様である。

例 無駄話：むだ はなし→むだばなし
 旅人：たび ひと→たびびと
 釣舟：つり ふね→つりぶね
 口下手：くち へた→くちべた
 釣堀：つり ほり→つりぼり

しかし、前接語の語尾が撥音「ン」で終わる時に限り、後続の [h-] は [b-] になる場合と [p-] になる場合の両様がある³²。

例 [h-] → [b-]

³¹ 政治大学日本語学科の 2008 年度大学院 1 年生の辞書調査によると、599 例のうち、促音にバ行音便が接続する例は 0 件であった。むろん、外来語、オノマトペ、間投詞の場合はこの限りではない。

例 ワッフル（外来語）、アッハッハ（オノマトペ）、ドッシャー（間投詞）

³² 数量詞は特別例外である。

例 2 杯：にはい 3 杯：さんはい／さんばい 4 杯：よんはい

自慢話：じまん はなし →じまんばなし ×じまんぱなし
 記念日：きねん ひ →きねんび ×きねんぴ
 天袋：てん ふくろ →てんぶくろ ×てんぷくろ
 相部屋：ふとん へや →ふとんべや ×ふとんぺや
 無縁仏：むえん ほとけ →むえんぼとけ ×むえんぽとけ

例 [h-] → [p-]

散髪：さん はつ →さんぱつ ×さんばつ
 鉛筆：えん ひつ →えんぴつ ×えんびつ
 反復：はん ふく →はんぷく ×はんぶく
 転変：てん へん →てんぺん ×てんべん
 担保：たん ほ →たんぽ ×たんぼ

3. 3. 2. 2 弁別の仕方

前接音が撥音の場合に、なぜ [h] は音便変化を被るのだろうか。これは、[n] の調音法からくるものであろう。ン の音は舌面のどこかを口蓋に接触させて作る音であるが、舌と口蓋の接触位置は後接音の調音点によって決まる（前方同化）。ンの後接子音が軟口蓋摩擦音の [h] である場合、後舌面を軟口蓋に接触させて、しかも破裂させないようにしながらすぐに摩擦音を作らねばならない。（破裂させれば [k] 音になってしなう。）これは、かなり技を必要とする作業である。それより、[n] の異音である [m] を作って両唇を破裂させた方が楽である。かくして、[h] は両唇破裂音の [b] または [p] になるのである。

では、撥音に後続するハ行音は、いったい、どのような環境で [h-] が [b-] になったり [p-] になったりするのだろうか。

一つは、語種によると考えられる。[h-] → [b-] の連濁例を探すのは、かなり苦勞するが、[h-] → [p-] の変化例はいくらでも見つかる。上記の例を見るに、[h-] → [b-] の連濁現象を起こす語の多くは後接語が和語である場合が多いことがわか

る。それに対し、[h-] → [p-] の音便現象を起こす語の多くは前接語も後接語も漢語、あるいは明治以降に日本に入ってきた語である。

[p] の音が伝統的な日本の音ではなかったことは、前節で述べたようにパ行音がオノマトペ、外来語以外の語には現われていないことからわかる。伝統的な語は [h-] → [b-]、近代的な語は [h-] → [p-] と音便変化すると言ってよさそうである³³。しかし、これは、語彙史をひもといて一語一語調べてみないとわからない方法である。

もう一つは、より言語学的方法である。前接語が撥音でない場合の音便変化現象を参考にするのである。即ち、

- ① 前接語が撥音以外の音の時に [h-] が [b-] になる語は、前接語が撥音の時も [h-] は [b-] になる。
- ② 前接語が撥音以外の音の時に [h-] が連濁現象を起こさない語は、前接語が撥音の時、[h-] は [p-] になる³⁴。

① [h-] → [b-] の例

小話：こ はなし → こ ばなし

自慢話：じまん はなし → じまん ばなし

厄日：やく ひ → やく び

記念日：きねん ひ → きねん び

紙袋：かみ ふくろ → かみ ぶくろ

天袋：てん ふくろ → てん ぶくろ

相部屋：あい へや → あい べや

布団部屋：ふとん へや → ふとん べや

³³ 但し、前接環境が [n] の場合の後続 [h] の漢語でも、[b] 変化と [p] 変化の両方を持つ語もある。例えば、「二巻本（にかんぼん）」「発禁本（はつきんぼん）」は [h] が [b] に変わり、「原本（げんぼん）」「献本（けんぼん）」は [p] に変わる。しかし、これも何らかの規則があると思われる。

³⁴ 但し、焚き火：たきび、不審火：ふしんび、天火：てんび、等の例もある。しかし、このような例外も、何らかの理由があると考えられる。例えば、「天火」というのは西洋のガスオーブンの日本語訳で、比較的新しくできた語であるから、という理由などが考えられる。

喉仏：のど ほとけ→のどぼとけ

無縁仏：むえん ほとけ→むえんぼとけ

② [h-] → [p-] の例

白髪：はくはつ (→×はくばつ)

散髪：さん はつ→さんぱつ

毛筆：もうひつ (→×もうびつ)

鉛筆：えん ひつ→えんぴつ

回復：かいふく (→×かいぶく)

反復：はん ふく→はんぷく

急変：きゅうへん (→×きゅうべん)

転変：てん へん→てんぺん

確保：かくほ (→×かくぼ)

担保：たん ほ→たんぼ

例は枚挙に暇がないが、ほぼ上記①②のように一般化できるであろう³⁵。

3. 4 無声子音 [p] の特殊性

以上、見てきたように、日本語において [p] の音は他の無声子音と比べて、いや、他のすべての音と比べてさえ、特殊な音であることがわかる。

3. 4. 1 促音化現象における [p] の特殊性

3. 4. 1. 1 促音化を受けにくい [h]

もともと無声子音の促音化は、母音無声化から始まったと思われる。母音無声化とは、無声子音に挟まれ、かつアクセント

³⁵ 但し、次の例に注意。a「雨降り(あめふり)」、b「障子張り(しょうじはり)」、c「羽織袴(はおりはかま)」、は連濁していないが、前接音が撥音の場合は[h-]は[p-]とならず、それぞれ、a「本降り(ほんぶり)」、b「一点張り(いってんばり)」、c「紺袴(こんばかま)」、となる。前接語－後接語の関係が「内項－動詞」の関係にある場合(a、bの例)、前接語－後接語の関係が同格並列の関係の場合(cの場合)は、連濁現象が起こりにくいとされている。

核のない母音のうち、最も高舌で最も響きの小さい [i] と [u] が無声化する現象であるが、その母音無声化がさらに進んで、無声化された子音がさらに後接子音に同化してしまったのである。

例：① 白金（はっきん）

haku-kin → haku~~ɸ~~kin → haku~~ɸ~~kin

② 発散（はっさん）

hatsu-san → hatsu~~ɸ~~san → hatsu~~ɸ~~san → hatsu~~ɸ~~san

③ 発展（はってん）

hatsu-ten → hatsu~~ɸ~~ten → hatsu~~ɸ~~ten → hatsu~~ɸ~~ten

①に見られるように、カ行音の [ku] と [ki] が続いた場合、前の [-ku] の母音 [u] が無声化すると [-kk-] と [k] の音が2つ並ぶが、これは事実上促音に等しくなる。それ故、[ku]の後に子音 [k-] が後続すると、前の [-ku] は促音化現象を起こすのである³⁶。

それ故、前接語の語尾の子音が無声子音のカ行音で母音が [u]、つまり [-ku] で、後続音も [k-] で始まる場合、前の [-ku] は促音化現象を起こす³⁷。

例 客観：きやく かん → きやくっかん

作曲：さく きよく → さくっきよく

特訓：とく くん → とくっくん

職権：しょく けん → しょくっけん

学校：がく こう → がくっこう

それでは、前接語の最後の音がサ行音の場合はどうか。前接語の最後の音がサ行音の「su」で後続音が [s-] の場合、前の

³⁶ もちろん、前接語の最後の母音が [-i] で終わる語もある（「空き缶（あきーかん）」「価値観（かちーかん）」など）が、[-u] で終わる語の方が促音化しやすい。つまり [-kuk-] [-tsut-] の方が [-kik-] [-tsut-] より促音に聞こえやすい。これは、[u] は後舌母音なので、[k] や [t] の音が呑み込まれてしまったように感じるからであろう。

³⁷ 但し、例外もある。例えば、

太極拳：たいきよ くけん ×たいきよっけん

これは、個々の語彙事情によるのであろう。

[-su] の母音 [u] が無声化して [-ss-] と [s] の音が2つ並んでも、促音表記はされないのである。例えば、「升席」(ますせき) ということばは、

masu-sseki → massseki → masseki

となり、これは事実上「まっせき」と調音しているにもかかわらず、表記は「ますせき」である。これは、[s] が摩擦音であることから来ていると思われる。即ち、破裂音の方が摩擦音よりも促音と認識されやすいのである。「まっせき」の [su] の前の促音は、調音時も摩擦音が聞こえ、破裂無声子音 [k] [t] [p] のように一拍停止しているという印象が弱い。そこで、「ますせき」と認識されるのであろう。

一方ハ行音の方はどうかと言うと、理論上促音化が起り得るのは前接語の最後の音がフ (ɸu) の時であるが、ハ行音の場合はハ (ha)、ヒ (çi)、フ (ɸu)、ヘ (he)、ホ (ho) では調音点も調音法も違う。(ɸu は両唇摩擦音、ha、he、ho は軟口蓋摩擦音、çi は咽頭摩擦音である。) よって、促音化が起り得るのは「-フフ-」[-fufu-] とフが2つ続く場合であるが、これも [s] の場合と同様のことが言える。例えば、「看護婦風」(かんどふふう) ということばは、

kangofu-fuu → kangofɸfuu → kangofffuu

となって、事実上は「かんどっふう」と調音しているにもかかわらず、「かんどふふう」と認識されているのは、やはり ɸu が破裂音でないことに起因しているであろう。「かんどっふう」のような促音化したフは調音時の摩擦音が聞こえ、一拍停止の印象が弱い。また、ハ行音の場合は、前述したように前の音が促音化する際には [h-] は [p-] になりやすいので、[-ff-] という促音を含む語の一語化が進めば、促音部分は [p] に取って代わられて [-pp-] になり兼ねない。つまり、「かんどふふう」という言葉が一語化してしまえば、「かんどっふう」と発音さ

れるようになるかもしれないのである³⁸。

こうしてみると、促音化を受けやすい無声子音は、

[t] > [k] > [s] > [h]

という左右行列をなすことがわかる。[-tsu] は後続のあらゆる無声子音の前で促音化され、[-ku] は後続の無声子音 [k-] の前でのみ促音化され、[-su] は事実上は後続の無声子音 [s-] の前で促音化されているがそのように認識されていない。[-fu] は後続の無声子音 [f-] の前で促音化されているが、促音部分はいつ [p] に取って代わられて [-pp-] となるかわからない運命にあるからである。

3. 4. 1. 2 促音化を引き起こしやすい [h]

「強勢のための促音化」の現象がある。前接語の語末に [-tsu] を持たない環境であるにも関わらず、「でかい」を「でっかい」、「ウソ」を「ウっソー」、「ふとい」を「ぶっとい」などと、わざわざ無声子音の前に促音を加えて言う現象である。この「強勢化」ということに関しては、[h] が断然強いのである。

「日本」を「にほん」と読むのか、「にっぽん」と読むのか、という議論はまだ決着がついていないようである。日本語教育では「にほん」で定着しているようだが、「にっぽん」と読む人はまだまだたくさんいる。古くは「日本」と書いて「やまと」と読んでいたが、奈良時代から「にほん」「にっぽん」と読まれていたようである。[h] の古代音が [p] であったことを考えるなら、「にっぽん」の方が古い読み方で、nippon→nipon→niϕon→nihon という変化を受けたとも考えられる。そして、昔は促音も半濁音も表記しなかったことから、「にほん」と書いて「にっぽん」と読んでいたことも考えられる。確かに、時代劇や古い映画などを見ると、「にっぽん」の方が

³⁸ 「気風」という語が「きっぷ」と読まれるのも、以上のような音韻変化をたどった結果と思われる。

遥かに多く耳に入る。

しかし、音韻理論からすると「にほん」という読み方が無標であり、「にっぽん」は後から促音化したという考え方もできる。何故なら、軟口蓋摩擦音の [h] より両唇破裂音の [p] の方が発音はるかに容易であるため、「にほん」より「にっぽん」の方が確かに発音しやすいからである³⁹。

この他、「やはり→やっぱり」「もはら→もっばら」「強情張り：ごうじょうはり→ごうじょっぱり」「やり放し：やりはなし→やりっばなし」「屁放り腰：へひりごし→へっぴりごし」「男振り：おとこぶり→おとこっぶり」「田舎兵衛：いなかべえ→いなかっぺ」「よほど→よっほど」など促音化した語がすでに語彙として定着しているものもあれば、「二人⁴⁰：にはち→にっばち」「野原：のはら→のっばら」「ケンカ早い：けんかばやい→けんかっばやい」「赤恥：あかはじ→あかっばじ」といった比較的新しいパ行音転化語など、わざわざ [h] を [p] に変えて促音化させているものもある。

これは、破裂音の発音のしやすさと、促音と破裂音が連続することによってかもし出される強勢感、印象の強さという効果をねらったものではないかと考えられる。できる限り人の感覚に訴えるように作られたオノマトペにおいて自由にパ行が用いられていることは、それを裏付けていると思われる。

こう考えると、最も促音化を引き起こしやすい無声子音は [h] だということになる。そして、前接の「tsu」と「ku」を促音化する [k] が続き、次は前接の「tsu」を促音化する [t] [s] である。[h] は前接の「tsu」を促音化するばかりでなく、

³⁹ 子供が日本語の音節を覚える時、真っ先に習得するのは両唇音や破裂音であり、軟口蓋音や摩擦音はかなり後になるそうである。マ行、パ行、タ行の順で、カ行やハ行はかなり後になり、サ行は最も遅れると言う。（だからこそ、幼児にとって最も重要な母親と父親は、英語でも中国語でも両唇破裂音の「ママ」「パパ」なのであろう。）このことは、破裂音はその他の音よりも子音性が高いことを物語っている。

⁴⁰ 商売用語で2月と8月のこと。商売が最も停滞して商売人を悩ませる月と言われる。

自身の前に促音を造成する力が強い。但し、[h] は前接語の促音化が完了すると同時に自身は姿を消し、その座を破裂音の [p] に譲ることになる。

このように、[p] は [h] をして「最も促音化されにくく、かつ最も促音化を引き起こしやすい音」（自身は促音になりにくい）が、他の無声子音を促音に変えたり新しく促音を作ったりしやすい音」という、「促音造成のチャンピオン」にしているのである。

すなわち、無声子音は

$$[h] > [t] > [k] > [s]$$

の順に有標→無標になる、という左右行列をなしていると言える。

3. 4. 2 [p] の音構成上の特殊性

第2節では、ハ行音のパ行音変化の規則を見てきた。

- ① ハ行音 [h] を語頭に持つ語の前に [-tsu] の語が来ると、[tsu] は促音化し、語頭のハ行音 [h-] はパ行音 [p-] になる。

例：筆（ひつ）→達筆（たっびつ）

但し、このような変化は漢語に限られる。

例：春（はる）→初春（はっはる） ×はっばる

前接語が数字の場合は、前接語語尾が [-ku] [-chi] では、語種に関わらず、[h-] は [p-] になる⁴¹。

例：箱（はこ）→6箱（ろっぱこ）、8箱（はっぱこ）

分（ぶん）→6分（ろっぷん）、8分（はっぷん）

- ② ハ行音 [h-] を語頭に持つ語は、(a)通常連濁現象を起こさない語では、前に撥音「ン」[n] が来ると、[h-] がパ行音 [p-]

⁴¹ 数字の十は末尾音が [-ku] [-chi] ではないが、後続語の語頭音は [h-] → [p-] になるが、これは「じゅう」の読み方が [jip] → [juf] → [jiu] → [juu] と変化してきたことから、古代音 p を残している所以であろうと思われる。

に変化する。これは漢語に多い。(b)通常バ行音 [b-] に連濁変化する語では、前に撥音「ン」[n] が来ると、[h-] はやはりバ行音 [b-] に変化する。これは和語に多い⁴²。

例(a)筆（ひつ）：自筆（じひつ）→断筆（だんびつ）

例(b)歯（は）：虫歯（むしば）→金歯（きんば）

以上のことは、ひとえに日本語の音体系における [p] の特殊性から来ている。五十音の清音と濁音の対立は、音声学的に見れば調音点と調音法を同じくする無声と有声の対立音であるはずである。ところが、ハ行がその対立の系統を破っているのである。脚注5で示した通り、ハ行音の子音は古代音では [p] であり、その後は [ϕ] になった。いずれも同じ両唇音の [b] と対立関係にあったのである。ところが調音上の省エネで合唇後退し、[ϕ] 音は音形こそ似ているが全く調音点も調音法も異なった軟口蓋摩擦音の [h] になってしまい、無声と有声の対立が崩れてしまった。

その後、促音（これも歴史的には比較的新しく、平安時代後期にできた音である⁴³）が調音されるようになると、無声子音の音便化現象が始まった。促音は、破裂音の前以外では非常に調音しにくい。ここで困ったのは [h] である。破裂音 [ϕ] 音があった時代ならば、「日本 (niϕon)」などの [ϕϕ] は促音化できるが、「割烹 (かつ+ほう)」は「烹」の [h] が破裂音ではない。そこで、本来 [b] と対立する [p] が復活して（室町—江戸時代と言われる）促音化の便宜を図ったのであろう。もともと両唇破裂有声音の [b] があるのだから、対立する無声音 [p] が発音できないわけではない。

⁴² 周知の事実として、むろん後続語の第二音が濁音の場合は、前接語末尾が [n] であっても、第一音は連濁しない。

例：禿げ（はげ）→丸禿げ（まるはげ） ×まるばげ

しかし、[h] が [p] に変わる時は、この規則は働かない。

蛸：つる禿げ：つるはげ→つるっばげ ×つるばげ

⁴³ 促音は専ら音調整のための音便であるため、「平家物語」などの「語り物」と呼ばれる文学作品に多く見られるようである。

かくして、[p] はもともとの和語・漢語の構成音として現われることがなく、専ら音調整の役割を課されるようになったのである。そして、いったん認識された [p] はその音の独特さ⁴⁴から大衆語であるオノマトペや俗語である囃し言葉・罵り言葉に多用されるようになり、近代以降は外来語において初めて実質語の構成音として市民権を得るようになったのではないだろうか。

4. おわりに

4. 1 五十音図の不整合性の由来

本稿2の考察より、サ行音とザ行音は調音点にわずかなずれがあること、またザ行音には歯茎硬口蓋破擦音と硬口蓋摩擦音の異音があることがわかった。ザ行音に対立する無声音はサ行音ではなく、厳密には[ts]を子音に持つ音である。

また、ザ行イ段音・ウ段音（ジ、ズ）とダ行イ段音・ウ段音（ヂ、ヅ）は古代音では違った音であったものが、後方同化による単なる異音になってしまったことも、歴史的・音声学的な考察から明らかになった。

さらに、ハ行音の清音－濁音の非対称性はひとえに音韻の歴史的変遷によるものである。パ行音は古代には活躍したが中古・中世で和語の構成員としての資格をいったん失い、近世以後において再び外来語や擬声語、連濁音便など、もっぱら音調整の役割を担うものとして復活する、という特殊な遍歴を持つ音である。ハ行音の音便変化の規則を見れば、パ行音が和語の構成音となっていないことが明瞭である。ここからパ行音は「半濁音」という清濁の正統からはずれた名称を与えられ、清

⁴⁴ 筆者より一世代前の流行り歌に、「パピプペ、パピプペ、パピプペポうちの女房にゃ髭がある」という一節がある。戦後、古い価値観から解放されて女性が強くなった時の恐妻を嘆く歌である。新しい外来語がどんどん入ってきたこの時代に、滑稽味を出す囃し言葉としてパ行そのものが選ばれたということは興味深い事実ではないだろうか。

濁の対立関係と有声—無声の対立関係がずれた位置に置かれているのである。

サ行音とザ行音、ハ行音とパ行音は、日本語の音節の歴史的変遷と音韻上の整理が入り混じっており、それが五十音図を不透明なものにしていると思われる。

4. 2音節の調音点・調音法に則した五十音図

現行の五十音図を、音声学の観点から整理してみたい。

現代日本語の有声—無声の対立を持つ音は [k - g] [s - z] [t - d] [p - b] の4種である⁴⁵。これらの有声音に「濁音」「半濁音」を冠するのは、単に有声音に濁点・半濁点が付されているという表記上の理由からに過ぎない。同じ有声音の [n] [m] [y] [r] [w] 及び母音には「清音」の名が冠され、また音素的には有声—無声の対立から外れている無声音 [h] も「清音」とされている。有声—無声という音声学的な配列が、現行の五十音図では体系的に示されていない。

一方、ア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワの行配列は悉曇系のもので、日本語の音韻組織に則って作られたものではないが、ある系統性が感じられる。母音（ア行）→軟口蓋破裂音（カ行とガ行）→硬口蓋摩擦音（サ行とザ行）→歯茎破裂音（タ行とダ行⁴⁶）→歯茎鼻音（ナ行）→軟口蓋摩擦音（ハ行）と両唇破裂音（バ行とパ行）→両唇鼻音（マ行）→硬口蓋接近音（ヤ行）→歯茎弾音（ラ行）→両唇接近音（ワ行）、と、ほぼ口むろの後部から前部へと並べられている。このうち、ハ行だけが軟口蓋摩擦音で後部に逆戻りしているようであるが、これも [h] の古音が両唇音の [ʔ] であったことを考えれば、整合

⁴⁵ サ行音のシとジは [ʃ - j]、タ行音のチとヂ、ツとヅは [tʃ - dʒ, ts - dz] の対立もあるが、これらは本来のサ行音やタ行音と調音点が少しずれるので、無標のものとは言えない。

⁴⁶ タ行とダ行のイ段とウ段の音は破擦音であるが、これも古音では [ti] [tu] [di] [du] のように発音されていた。

的と思われる。また、ヤ行音は江戸時代に近い頃に発生した拗音に由来するものであり、ラ行音は漢字音の発音で生じた音韻であるので、古代では和語の語頭に用いられることがなく、和語を構成する音節として市民権がなかった、ワ行音は平安時代に語中・語末の〔ϕ〕音が合唇後退してできた音である。それ故、比較的後代にできた音節として、ヤ行音・ラ行音・ワ行音が最も後方に位置しているのも、偶然ではあろうが整合性が感じられる。これに見るように、現代語から見ると、五十音は大部分が調音点により配列されているものの、完全ではない。

そこで、調音点を一次的基準とし、調音法を二次的基準とした五十音表を考案すると、ア、カ（ガ）、ハ、ヤ、サ（ザ）、タ（ダ）、ナ、ラ、パ（バ）、マ、ワ、となり、ハ行が独立して摩擦音としてカ行の直後に位置し、パ行が清音に昇格し、ヤ行とラ行とワ行が調音点に基づいてそれぞれ硬口蓋音、歯茎音、両唇音の最後に位置づけられることになる。そして、「はぐれ音」は個別に表記する。

それを図 11 として、本稿の最後に提案する次第である。

図 11. 調音点・調音法に則した五十音表

(網掛け文字は「はぐれ音節」、**深き出し文字** ははぐれ出た音節の痕跡、・・・は現代日本語の直音にはない音節)

| 子音 | 母音 | | あ | | い | | う | | え | | お | |
|----------------------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------|-----|-----|--------|-----|--------|----------------|
| | 無声音 | 有声音 | 無声音 | 有声音 | 無声音 | 有声音 | 無声音 | 有声音 | 無声音 | 有声音 | 無声音 | 有声音 |
| 調音点 (調音者) | [k][t][p] | [g][d][b] | [tʃ][ts] | [dʒ][dz] | [ç][h][s][ʃ] | [j][z] | [c] | [r] | [n][m] | [ɹ] | [y][w] | |
| 咽頭音 [ç] | | | | | ひ・・・ (後舌面) | | | | | | | |
| 軟口蓋音 [k][g][h] | かきくけこ (後舌面) | がぎぐげご | | | はひへほ (後舌面) | | | | | | | |
| 硬口蓋音 [s][j][y] | | | ち・・・ち (舌端) | つ・・・づ (舌端) | し・・・じ (中舌面) | | | | | | | や・ゆ・よ (中舌面) |
| 歯茎硬口蓋音 [tʃ][ts][dʒ][dz] | | | ち・・・ち (中舌面) | づ・・・づ (中舌面) | しすせそ (前舌面) | じずぜ ぞ | | | | | | |
| 歯茎音 [t][d][n][r] | たちつと (舌端) | たぢづでど (舌端) | | | | | | | | | | |
| 両唇音 [p][b][ʃ][m][w] | ぱびぶべぼ (両唇) | ばびぶべぼ (両唇) | | | ふ・・・ (両唇) | | | | | | | わ・・・を (両唇) |

参考文献

秋永一枝、「発音の移り変わり」、阪倉篤義編、『日本語の歴史』、大修館書店、1990、77 - 114。

上田万年、『言語学』、教育出版、1975。

沖森卓也編、『日本語史』、おうふう、1989。

窪園晴夫、『音声学・音韻論』、くろしお出版、1998。

窪園晴夫、『現代言語学入門 日本語の音声』、岩波書店、1999。

橋本進吉、「國語音韻史の研究」、1955。

山口明穂・鈴木英夫・板梨隆三・月本雅幸、『日本語の歴史』、東京大学出版会、1997。

ジェフリー・K・プラム、ウィリアム・A・ラデュサー編、土田滋、福井玲、中川裕訳、『世界音声記号辞典』、三省堂、2003。